

# 「大坂の史跡を訪ねて」連載26回目

夕陽丘周辺(その8)

オサタニ ヨシハル  
長谷 吉治

※連載25回目の続編です。夕陽丘～中寺町を紹介します。

## 1 蘭医ボードウィン寓居跡

中央区中寺1-1(法性寺)

- ▶ ボードウィンは幕末期にオランダから来日しました。長崎の医学所で医学生(長与専齋ら約100人が就学中)に指導を行っていましたが、その後、大坂に来ることになりました。慶応4年(1868)3月、明治天皇が大坂に行幸します。明治天皇は病院の必要性を感じ、大阪府に病院の設立を命じました。当時の大阪府知事(第2代目)後藤象二郎、参与小松帯刀らが財政難の中、開設に尽力します。明治2年(1869)2月、緒方惟準(これよし)を院長とし、ボードウィンが教師として学問の研究に熱心だった大福寺に仮病院を開設します。ボードウィンの身の回りの世話は、薩摩屋半兵衛に任せられ、自身の菩提寺である法性寺を寓居に推挙しました。薩摩屋半兵衛の教化を受け、窮屈そうに膝を折り、南無妙法蓮華経のお題目を唱えるようになったといわれています。明治3年8月浪華(大阪)仮病院の職を辞し、本国へ帰国。明治18年63歳で生涯を閉じます。



ボードウィンが法性寺を去るとき、惜別の記念として砂糖坪など何点か残しました。現在、法性寺にはボードウィンの遺品が数点残されています。



ボードウィンの遺品

<ボードウインの治療を受けた維新の活躍者>

ボードウインは、この病院に在籍中に明治維新で活躍した2名を診察しています。京都の三条木屋町で刺客に襲われ重傷を負った、長州出身の大村益次郎です。そして病気がちな体を無理し続け、ついに重病になった薩摩藩出身の小松帯刀です。大村益次郎は手術の甲斐なく明治2年11月5日に亡くなりました。遺言により大村益次郎の手術のとき切断された右大腿骨は、恩師である緒方洪庵の墓所の側に葬られました。(大阪市北区にある龍海禅寺)小松帯刀は明治2年7月にボードウインの診察を受けましたが、これも甲斐なく明治3年7月20日に亡くなります。当初は大阪の夕陽丘に葬られましたが、明治9年に郷里の園林寺に葬られました。

大村益次郎



小松帯刀



2 薩摩屋半兵衛墓所

中央区中寺1-1(法性寺)

▶ 薩摩屋半兵衛に関し、法性寺さんのホームページに次のように紹介されています。(http://members.at.infoseek.co.jp/hossyoji/index/rekisi.htm)

法性寺の檀家である薩摩藩出入御用商人、薩摩屋半兵衛は幕末長崎表と商取引があり、蘭語を知る必要を感じて緒方洪庵の適塾に通学して熱心に蘭語を習いました。この23代・24代薩摩屋半兵衛は英邁の気質を具え、義侠の風ある、商人としては稀に見る硬骨の人であったといえます。鳥羽伏見の合戦の折には薩摩藩の軍費は一切薩摩屋の手で調えられたといい、維新当時の志士で薩摩屋の世話にならざるもの無しというほどでした。そのような関係から新撰組に付け狙われた坂本竜馬が法性寺に身を隠したり、蘭医ボードウインが寓居として法性寺に逗留していました。明治27年薩摩屋の外護を受け、本堂が再建され隆盛を極めていましたが、昭和20年3月13日年の大阪大空襲で灰燼と化し、戦後の復興がなされ今日に至っています。



薩摩屋半兵衛



薩摩屋半兵衛墓所



薩摩屋半兵衛は、源氏の子孫にあたります。平安時代末期、源頼政が宇治の戦に敗れ、後裔の親綱が京都嵯峨にある川端に隠れ住んだことから、その後、川端姓を名乗ります。その23代目に当たる川端半兵衛広長は、大坂で父祖の家業を継ぎ、薩摩藩出入り御用商人となり、薩摩の産物(砂糖、煙草など)を扱い、薩摩藩邸の鍵保管役を務めました。半兵衛広長は長崎との商取引をする中で、蘭語習得の必要性を感じ勉強しました。

その子、24代目半兵衛直廉も父の影響を大いに受けました。この薩摩屋24代目半兵衛直廉は、鳥羽伏見の合戦の際、薩摩藩の軍費を整え、貢献しています。

ボードウィンと川端家は、蘭語の習得の際、適塾を開塾した緒方洪庵を通じて親しくなりました。浪華仮病院の教師として招聘された蘭医ボードウインの寓居先に、自身の菩提寺である法性寺を推挙します。当時の住職竜見日定師は、ボードウインを喜んで受け入れます。広長は明治4年(1871)に55歳で、直廉は大正3年(1914)に75歳で他界しています。

#### <くだいもくばし>

大坂には人工で作られた川がたくさんあり、江戸堀川もそのうちのひとつでした。

元和3年(1617)に完成し、昭和30年9月に埋め立てられました。

長さ11町41間(約1270m)、幅は上流で13間(約23.5m)、下流で18間(約32.6m)の運河で、東から西へ撞木橋・江戸橋・犬齋橋・阿波殿橋・大目橋・花乃井橋・江戸堀橋・西北橋・崎吉橋の9橋が架かっていました。

その中の「大目橋」は、薩摩屋半兵衛の尽力で架けた橋です。

半兵衛は法華経の信者であったことから「題目橋」と名付けられました。

後に字が変わり、おおめばしと読まれるようになったといえます。

### 3 坂本龍馬潜伏の地

中央区中寺1-1(法性寺)

宮本又次著の「大阪商人」には次のように記載されています。  
「維新当時の志士で薩摩屋の世話にならざるもの無しというほどであった。坂本竜馬の如きも、大阪にて幕府の士に付け狙われたので、半兵衛父子に保護せられ、江戸堀の邸宅内に、あるいは菩提寺の法性寺に身を匿したことがある。」

神戸海軍操練所の閉鎖後、行き場を失った坂本龍馬や土佐脱藩浪士らは勝海舟の尽力により、薩摩藩に匿ってもらいます。その後、亀山社中へと発展していくのですが、龍馬と薩摩藩は、濃密な関係を持ちます。そのような点から考えると、薩摩藩の御用商人であった薩摩屋半兵衛とも関連があった可能性があります。海援隊は大阪出張所(屯所)を「薩万」に設置していました。この薩万は、岡内俊太郎(土佐藩)が同藩の佐々木高行にあてた手紙によりますと

「龍馬、(中島)作太郎等は薩邸の前に薩摩屋家ありて、此家に行き、高松太郎、白峰俊馬、菅野覚兵衛等居合わせ居り、将来の事を戒め含め置き、大坂を発して京都に登り(以下省略)」

とあります。この薩摩屋が薩万をさしていますが、半兵衛が龍馬ら海援隊を援護した可能性は強いと考えられます。

龍馬の法性寺潜伏に関しては資料不足で、この「大阪商人」だけでは断定できませんが、上記のように考えると可能性も低くは無いと思い、今回ご紹介に至りました。



坂本龍馬像(亀山社中)